



**Data**

監督・脚本・製作：マーティン・マクドナー

出演：フランシス・マクドーマンド / ウディ・ハレルソン / サム・ロックウェル / アビー・コーニッシュ / ジョン・ホークス / ピーター・ディンクレイジ / ルーカス・ヘッジズ / ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ

## 👁️👁️ みどころ

今年のゴールデン・グローブ賞では、本作と『シェイプ・オブ・ウォーター』（17年）という、低予算ながら2つの「FOXサーチライト」作品が席卷！それは一体なぜ？本作を鑑賞する中、その分析をしっかりと！

まずはタイトルの意味の確認を兼ねて、「スリー・ビルボード」に載せられた広告を見れば、「こりゃダメ。こりゃ人権侵害だ」と誰もが思うが、本作はそこから素晴らしい人間ドラマに発展していく。

地味な監督、地味な俳優陣ながら、見事な脚本と見事な演出、そして見事な演技に大拍手！もっとも、登場人物たちの行為は「こりゃ、違法！」というものが多いため、くれぐれも真似はしないように。そしてそれは、余韻を残す素晴らしい幕切れでも同じだから、そこにも注目！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■今年も低予算の“FOXサーチライト”作品が席卷！■□■

2018年1月7日（現地時間）に開催された、第75回ゴールデン・グローブ賞で主要6部門にノミネートされていた本作は見事、作品賞（ドラマ部門）、主演女優賞（ドラマ部門）、助演男優賞、脚本賞の最多4冠を獲得した。本作は1994年に設立されたFOXサーチライト・ピクチャーズの作品で、同社は近時、『リトル・ミス・サンシャイン』（06年）（『シネマルーム12』414頁参照）、『JUNO/ジュノ』（07年）（『シネマルーム19』294頁参照）、『(500)日のサマー』（『シネマルーム24』未掲載）（09年）、『ブラック・スワン』（10年）（『シネマルーム26』22頁参照）、『グランド・ブダペスト・ホテル』（13年）（『シネマルーム33』17頁参照）、『バードマン あるいは（無知

がもたらす予期せぬ奇跡』(14年)、『シネマルーム35』10頁参照)、『ブルックリン』(15年)、『シネマルーム38』211頁参照)等、ハリウッド大作とは一線を画する比較的低予算作品で、なおかつ監督、脚本家、アクターなどの新しい才能を発掘している。これは映画界における“目利き”としての役割に会社の方針が特化しているからこそ、同社の躍進は映画界全体の快挙として受けとめられている。

同社が「刺激的なスタジオであるための5か条」として掲げているのは、次の5つだ。

- ①サーチライト魂を受け継ぐ男女2人の共同社長体制
- ②作品数は年間最大12本を目安にすること
- ③手掛ける作品は製作と買い付けが半々
- ④製作費は1500万ドル以下の低予算が基本
- ⑤潜在するニッチなマーケットを掘り起こす

ちなみに『JUNO/ジュノ』の製作費は750万ドル、『ブラック・スワン』は1300万ドルだが、『タイタニック』(97年)は2億ドル、『猿の惑星 聖戦記』(17年)は1.5億ドルだから、その違いは歴然。しかし、本作の製作費も1200万ドルだそうだ。

なお、私が3月に鑑賞予定としている『シェイプ・オブ・ウォーター』(17年)も同社作品で、同作もゴールデン・グローブ賞で監督賞と作曲賞の2部門を受賞しているからすごい。ゴールデン・グローブ賞は「アカデミー賞の前哨戦」と言われているが、両作ともノミネートされているから、そこでの受賞の期待も高まっている。カンヌ、ベルリン、ベネチアのヨーロッパ3大映画祭での受賞作はアメリカのゴールデン・グローブ賞やアカデミー賞とは異質の作品が多いが、本作は2017年のベネチア国際映画祭でも脚本賞を受賞しているから、さらにすごい。

しかし、本作のタイトルである「スリー・ビルボード」って一体ナニ?そして、本作は一体どんな映画・・・?

## ■□■地味な監督、地味な俳優陣、しかし・・・■□■

3月1日からは『15時17分、パリ行き』(18年)が公開されるが、その監督であるクリント・イーストウッドは日本でも超有名。また、昨年12月23日に観た『STAR WARS 最後のジェダイ』(17年)のジョージ・ルーカス監督も超有名。また、社会問題提起作にこだわる『デトロイト』(17年)の女流監督キャスリン・ピグローも『ハート・ロッカー』(08年)、『シネマルーム24』15頁参照)や『ゼロ・ダーク・サーティ』(12年)、『シネマルーム30』35頁参照)で超有名だ。しかし、今回ゴールデン・グローブ賞4部門をゲットした本作のマーティン・マクドナー監督をあなたは知ってる?また、本作で主役のミルドレッド役を演じた1957年生まれ女優フランシス・マクドーマンやディクソン巡査を演じたサム・ロックウェルをあなたは知ってる?

本作で私がかろうじて知っているのはエビング警察署長ウィロビーを演じたウディ・ハレルソンだけで、その他は監督も俳優陣も知らない人ばかりだ。それは何故かという、みんな地味な人ばかりだから？しかし、地味と実力はまったく意味が違う。私はフランシス・マクドーマンドを全く知らなかったが、彼女はシャーリーズ・セロンが主演した『スタンドアップ』（05年）（『シネマルーム9』186頁参照）でアカデミー賞にノミネートされ、『ファーゴ』（96年）で同賞主演女優賞を受賞したこともある実力派らしい。

タイトルの「スリー・ビルボード」とは3枚の広告看板のこと。映画冒頭、ミズーリ州にある架空の田舎町エビングにある、“迷った奴かぼんくらか通らない”寂れた道路に並ぶ3枚の看板に、突然「レイプされて死亡」、「犯人逮捕はまだ?」、「なぜ? ウィロビー署長」と書かれた広告が登場する。こんな広告を出すミルドレッドって一体何者。名前が出されたウィロビー署長はただちにミルドレッド宅を訪れたが、そこで見せるミルドレッドの対応とは？このシーンを観ただけで、フランシス・マクドーマンドという女優が本作で演じるミルドレッドの役柄と演技のすごさがすぐわかる。

他方、『デトロイト』（17年）では差別主義者であるデトロイト市警の警官フィリップ・クラウスが酷い捜査と取り調べをしていたが、エビング警察署に勤務する本作のディクソン巡査も黒人の被疑者に暴力をふるう等何かとトラブルの元になる男らしい。そんな地味な男も、本作では何ともしごい役ですごい演技を！

## ■□■これも表現の自由？それとも・・・？■□■

この広告はミルドレッドが地元の広告社に勤める男レッド（ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ）と1年間の契約を交わしたものだが、私がまず第1に考えたのは、その費用はHow much?ということ。いくら田舎町の寂れた道路に立つスリー・ビルボードとはいえ、その費用はかなりのものでは？その次に考えたのは、これも表現の自由？それとも・・・？ということだ。

ミルドレッドがそんな手段に訴えたのは、彼女が7カ月前に娘をレイプされたうえ殺された事件の捜査が一向に進展しないことに腹を立てたためだ。事件の捜査が進まないのはよくあること。それなのにこんな広告を出してOKなの？こんな広告を出せば、ミルドレッドはもちろん広告社もウィロビー署長から名誉毀損で損害賠償請求されるのでは？ミルドレッドはここまで表現の自由が保証されているの？それとも・・・？

自宅で妻のアン（アビー・コーニッシュ）や2人の幼い娘と一緒にくつろいでいたウィロビー署長は、パトロール中にこの看板を見つけたディクソン巡査から報告を聞いてびっくり。さらに、テレビのニュース番組で取材をうけたミルドレッドが「責任はウィロビー署長にある」と答えていることにも、ビックリ。普通ならそれに激怒して何らかの処置を取るところだが本作にみるウィロビー署長は紳士的。まずは自らミルドレッドの家を訪れて、捜査状況を丁寧に説明するが、ミルドレッドはそれに対して「そうやって弁解してい

る間にも、別の子が犯されている」とはねつけたばかりか、「末期ガンのために先がない」と告白する署長に対して、平然と「町中の人知っている」と回答。この態度は一体ナニ！この女はいったい何様なの？本作を観ている観客は、ミルドレッドにそこまでの表現の自由があるのか否か、という疑問を抱く他、一斉にミルドレッドという女に対する反発心が生まれるはずだ。ミルドレッドは一体なぜそこまでの行動とそこまでの発言を・・・？

## ■□■静かな田舎町に思いがけない抗争が勃発！■□■

神戸で君臨していた山口組は今、「六代目山口組」と、そこから分裂した「神戸山口組」、そこから再分裂した「任侠山口組」の間で、壮烈なヤクザ抗争が展開されているが、それは一体なぜ？北野武監督の『アウトレイジ 最終章』（17年）では、冒頭に見た韓国での花田のお遊びが張グループと花菱会抗争の原因になっていたが、この抗争はヤクザ社会ならではのものだった。それに対して本作では、ミルドレッドが道路上に出したスリー・ビルボードを契機として、人情味溢れるウィロビー署長を敬愛していたディクソン巡査とミルドレッドとの間でもものすごい抗争が勃発してくるので、それに注目！

わざわざ捜査状況の説明に来たウィロビー署長に対するミルドレッドの発言や態度もひどいが、説教するためにやって来た神父サマに対するミルドレッドの発言もひどい。これらの発言は弁論術を学ぶべき弁護士にはある意味では大いに参考になるが、ミルドレッドの歯を治療する歯科医師に対するミルドレッドの「逆襲」はひどすぎる。これは明らかな傷害罪だ。エビングの町の多くの人々はウィロビー署長を敬愛していたから、広告の掲示以降ミルドレッドが町中の人々を敵に回すことになったのは当然だ。

本作中盤はそんなミルドレッドとディクソン巡査をはじめとする町の人々との抗争ぶりが描かれるが、それはどこまでエスカレートしていくの・・・？

## ■□■看板の放火、署長の自殺、さらに・・・さらに・・・■□■

ミルドレッドに向かってきた最強の敵はディクソン巡査だが、ミルドレッドは一人息子のロビー（ルーカス・ヘッジズ）、離婚した元夫のチャーリー（ジョン・ホークス）からも反発を受けることに。お姉さんがレイプされて殺されてしまった弟のロビーは、一瞬でも姉の死を忘れないのに、学校からの帰り道にミルドレッドがそんな看板を並べたことによって毎日その事実を突きつけられることに。また、チャーリーも、「連中は捜査よりお前を潰そうと必死だ」と忠告し、事件の1週間前に娘が父親と暮したいと泣きついてきて「俺は“ママという”と言った。そう言わなければ、死なずに済んだ」と畳みかけてきたから、さてミルドレッドは・・・？そんな最中のある日、問題の看板が誰かの手によって放火されたが、さてその犯人は？これは明らかな放火事件だから大問題。ミルドレッドが告訴すればただちに警察は捜査に乗り出さなければならないはずだが、さてミルドレッドはどうするの・・・？

さらに、ある日、末期ガンであることが町中に知れ渡っていたウィロビー署長が拳銃で自殺したとのニュースが流れると、町中の人々はビックリ。そしてミルドレッドに対する反感は最高潮に。そんな中、エビング広告社に乗り込んだディクソン巡査によって、レッドは鼻骨を折られたうえ、2階の窓から投げ飛ばされて大怪我を負うことに。いやはや、あの看板以降、エビングの町にはそんなこんなの大騒動が・・・。

他方、末期ガンを患っていたウィロビー署長が自殺した原因はミルドレッドが掲げたあのスリー・ビルボードに違いないと、町中の人々はミルドレッドに憤ったが、本作の脚本では「死せる孔明、生ける仲達を走らす」という「三国志」の故事と同じように、ウィロビー署長が書き残した3通の手紙（遺書）がその後のストーリー構成に大きな役割を果たすので、それにも注目！その1つが後述する「君はホントはいい警官だ。」と書いたディクソンへの手紙だが、あとの2つは、妻への手紙とミルドレッドに書き残した手紙で、それぞれその文面には大きな感銘を受ける。

本作でゴールデン・グローブ賞主演女優賞を受賞したフランシス・マクドーマンドはアカデミー賞でも主演女優賞が有力視されるが、本作ではその演技のみならず、全体のストーリー構成の素晴らしさを実感するためには、ウィロビー署長が3人の人たちに書き遺した3通の手紙にもしっかり注目したい。

## ■□■この凶暴性(?)に注目！そのエスカレートぶりは?■□■

綺麗な女優が登場する映画ではそのファッションも楽しみの1つだが、本作の主人公であるミルドレッドは一貫して不機嫌な顔できついセリフを吐きただけだし、着ている服も「戦闘服」とも言うべき「つなぎ」だけだから、女優としての魅力は一切ない。逆に歯科医師に対する「反撃」に見られる彼女の凶暴性(?)にビックリ！そして、それは無人の(?)エビング警察署に次々と火炎瓶を投げ込むという、とんでもない形にまでエスカレートしていくので、それに注目！

いくら愛する娘がレイプされ殺されたとはいえ、ウィロビー署長を攻撃するスリー・ビルボードを掲げたり、それに対して町民からこぞって攻撃されると、一介の主婦だったミルドレッドがここまで凶暴に反撃できることにビックリ。この反撃ぶりは『アウトレイジ 最終章』で見せたビートたけし演じる大友と同じくらいのレベルだと言わざるを得ない。

そんな中、ミルドレッドの唯一人の味方で、彼女の気を惹こうとしていた中古車のセールスマンをしている小男ジェームズ（ピーター・ディンクレイジ）は、ミルドレッドとの食事までこぎつけるものの、同じレストランで若い女と一緒に食事していた元夫のチャーリーとのやりとりの中、ジェームズもミルドレッドの元を去っていくことに。

## ■□■クビにされたディクソン巡査の生きざまは?■□■

本作では、ミルドレッドの凶暴性だけでなく、ディクソン巡査の凶暴性も目立っている。

ディクソン巡査がウィロビー署長を慕う気持ちは貴重だが、そうかといってスリー・ビルボードに広告を載せたエビング社に乗り込み、レッドを2階の窓から外に放り投げるといふ暴行・傷害行為はいくら何でもひどすぎる。ウィロビー署長に代わって新たに赴任してきた黒人の署長がディクソンを叱りつけ、銃とバッジを取り上げた上、自宅謹慎を命じたのは当然だ。

本作は、116分と通常の長さだが、詰め込まれているストーリーは多く、ディクソンについてのそれは2つある。その1つは、クビにされ、自宅でふさぎ込んでいるディクソンがバッジを返上するため警察署に入った中で、ウィロビー署長の手紙を読むストーリー。なるほど、この手紙を読ませるためにディクソンの仲間は夜一人で警察署に入ってくるよう促したわけだ。ところが、ディクソンが感動しながら夢中でその手紙を読んでいる時、無情にも外からミルドレッドが投げ込んだ火炎瓶が爆発し建物が炎上し始めたから大変。早く気づいて、早く脱走しなければ・・・。

ディクソン巡査に関するもう1つのストーリーは、ダイナリーでのある事件の発生。ヤケドも少し治り退院できたディクソンが、ある日1人で入っていたダイナリーで、背後の席に座った2人組の男の自慢話(?)を耳にすると……。ひょっとして、これはミルドレッドの娘へのレイプのこと……。ディクソンの耳にそう聞こえたのは当然だが、そこでディクソンの取った行動は、何とも意外なものだ。ディクソンは警官だから、今は謹慎処分中で銃もバッジも持っていないとはいえ、格闘能力はそれなりのものがあるはず。ならば、たとえ2人組が元軍人だとしても、それなりに2人組を痛めつけて、自慢話の内幕をゲロさせるくらいにはできるのでは?そう思っていると、ディクソンは2人組の席に移ると、いきなり女のように相手の男の顔をかきむしったうえ、2人の男からボコボコにされるがままに……。なぜディクソンは抵抗しなかったの?ここらあたりのストーリー構成が本作は実によく出来ている。本作後半はこのようにディクソンが身体をボコボコにされることの見返りとして手に入れた男のDNA鑑定資料によって、ミルドレッドの娘のレイプ犯特定捜査が進むことに……。ディクソンのみならず、新署長も観客もみんなそう思ったはずだが、さてそのDNA鑑定の結果は……?

## ■ラストに向けた展開は?GG賞4冠受賞にも納得!■

前述したディクソン巡査に関する2つのストーリーだけでも、その意外な展開をうまくまとめた脚本の素晴らしさに脱帽。従って116分の本作に詰め込まれたさまざまなストーリーを紡ぎ出した本作が、第75回ゴールデン・グローブ賞の脚本賞を受賞したのは当然だ。また、フランシス・マクドーマンドの主演女優賞も、サム・ロックウェルの助演男優賞も妥当。そして、2月17日に観た『グレイテスト・ショーマン』(17年)等を押しのけて、作品賞を受賞したことにも納得だ。

せっかく自らの身体をボコボコにされながら、レイプ犯をDNA鑑定するための資料を

爪の中にもぎ取ったにもかかわらず、それがミルドレッドの娘のレイプ犯逮捕の証拠にならなかったのは残念。しかし、ミルドレッドの娘がレイプされた当時中東に赴任していたという軍人のこの男はきっと中東の砂漠地帯で戦う中、現地の少女をレイプしたのだろう。もしそうなら、そんな男（軍人）がレイプ自慢をしながらこの国で偉そうに生きていていいの？

本作ラストに至って、ミルドレッドの凶暴性とディクソンの凶暴性の向かう方向が、この中東でのレイプ男（？）に合致していく脚本も意外性がある面白い。あのディクソンをボコボコにした男は今アイダホにいるらしい。それなら、2人してライフルを持ってアイダホまで乗り込んでいき、いっそのこと……。日本と違ってアメリカは銃を持つことを規制されていないが、あくまで法治国家だから、自力救済は禁止。さらに、月光仮面のように自分が「正義の味方」となって、レイプ犯を勝手に処分（射殺）することが許されないのは当然だ。従って、何となくそんな方向に向かっていくような雰囲気の本作は、法科大学院の教科書としては不向き。たしかにそれはそうだが、そんな本作のラストには何とも意外な爽快感が……。

2018（平成30）年2月19日記